

二〇二二年度 札幌大谷大学社会学部地域社会学科

一般選抜口期

国語

注意事項

- 1 試験開始の指示があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 問題冊子は8ページあります。
- 3 試験中に印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて試験監督者に知らせてください。

□ 次の文章は磯野真穂「自分らしさ」があなたを救う」(『他者と生きる リスク・病い・死をめぐる人類学』集英社新書、二〇二二年)の一部である。本文を読んで、後の問いに答えなさい(設問の都合で原文の一部を省略改変した)。

「自分らしさ」とは一体何のことを指すのだろうか? 私たちは何をしていたら自分らしく、何をしていなかったらそうでないのだろうか。Googleで「自分らしさ」がテキストに含まれるページを調べてみると、全部で932万件という天文学的な数が検出される。タイトルに「自分らしさ」が含まれるページだけに絞ると5万6600件となり、こちらもかなりの数である。

それではネット内においてこれはどういう言葉として定義されているのか。Googleには強調スニペットという機能があり、検索語を入れると、その言葉の定義などがトップに表示される仕様になっている。「自分らしさ」のそれは次のようだ。

自分らしさとは自分の価値観を大切にして、自然体で言動が行えることです。「らしさ」はそれ自体の特徴がよくわかる状態。それに自分がつくので、自分らしさとは自分の特徴がよく現れている状態とも言えるでしょう。自分らしさに似た類語として、個性・持ち味・キャラクター・独自性などがあります。(2021年4月30日時点)

これはいつけんわかるようで、実際は何も解説をしていない。昨今批判の対象にはなるものの、例えば女らしさ、男らしさといった言葉には、メイクをしているとか、家事をするとか、泣かないとか、あるいは力が強いとかいったように、その「らしさ」を【 a 】するための具体的な行動がそれぞれ存在する。他方「自分らしさ」はそうではない。自然体や自分の特徴が自分らしさと言われても、それは内容を説明したのではなく「自分らしさ」をAトートロジー(中略)で説明しているだけである。

加えて、「猫らしい」と口にするためには、猫がどんな生物かを知っていないと始まらないように、「自分らしさ」を語るためには、自分が何かを知っていないてはならない。しかし、これはすこぶる哲学的な問いである。何をしていたら自分で、何をしていたら自分ではないのか。いや、何をしようかと、自分は自分ではないのか。もしかしたら「自分」などいらないのではないか。このように考え出したらきりがない。

実際、「自分らしさ」とともに検索される言葉を調べると、「自分らしさ」への人々の戸惑いが窺える。なぜならそこで検索される上位3位は、「診断」「例」「わからない」であるからだ。932万件という膨大な「自分らしさ」の中で、「自分らしさ」にオボれる人が続出している。(中略)

2020年1月1日から12月31日にかけて出された新聞記事を見てみよう。朝日新聞のデータベースである「聞蔵Ⅱ」を用い、「自分らしさ」「自分らしい」「自分らしく」がタイトル、及び本文に含まれる記事を検索すると、399件のヒットがあった。その上で、先の3つの言葉の中で最も頻度の多い「自分らしく」が含まれる205の記事を内容において類別すると、「ジエンダー」「老い」「病気・障害」「スポーツ(課外活動・囲碁、将棋含む)」「若者」「働き方」「ファッション」「共生社会」「カルチャー(イベント・書籍・映画などの紹介)」「その他」の9カテゴリが見出された。

それではこれらの記事において「自分らしさ」はどのような意味で使われているのか。まず明確なのは、「自分らしさ」が、規範への抵抗を指していることである。例えば1月7日にはジェンダーに関する次のふたつの記事が掲載される。

ひとつは自分のことを「俺」と試しに呼ぶようにしたら、男子が自分を対等に扱うようになったという女子高校生の投稿。もうひとつは交通事故で瀕死の重傷を負ったことをきっかけに、女性として生きることを決めた赤坂マリアさんへのインタビューである。女子高校生、及び赤坂さんにとって、それぞれが選んだ生き方は「自分らしい」ものであり、ふたつの記事はともにそうあることの大切さを説く。

同時期発刊の『週刊朝日』(1/3-1/10 新春合併号)では、考古学者の吉村作治氏が、「どうせ死ぬなら、自分らしく、悔いなく逝こうぜ!」という精神を【 a 】するひとりとして紹介される。彼が特集された理由のひとつは、彼がエジプトにすでに墓を購入しており、死後はそこに土葬されることが決まっているからだ。火葬を見て、自分はあるように焼かれたくないと思ったことが土葬を選んだ理由である。つまり吉村氏は、火葬という日本の当たり前を逆らって土葬を決意したゆえに「自分らしい」。

「当然こうすべき」「ふつうはこうだろう」という考えに「抗う」ことで自分らしさ、その人らしさが【 a 】されるといった考え方は、老い、病気・障害関係の記事にも共通して見られる。

(中略)

規範あるいは世間の当たり前に逆らって自分の望みを実現する・表明するといった意味の「自分らしさ」は、結果興味深いところまで「カクチョウ」される。例えば1月22日には、弁護士を裏切って逃亡したカルロス・ゴーンの生き方が「自分らしい」と表現され、2月2日には、スイスの村で定期的に鳴る鐘の音を騒音であると訴えた女性が自身の行動を「自分らしい」と形容するコメントが掲載される。11月5日には形が丸ではない「規格外パール」と呼ばれるパールを選ぶことが自分らしさであるとの記事が掲載された。

これらの記事を踏まえると「自分らしく」あるためには次のふたつが必要であることが見えてくる。

①大勢がそのようなものとして疑わないことに対して抵抗すること。「抵抗」が大袈裟であれば、少なくとも大勢とは違う道を選択すること。

②①においてなされた選択は、他者からの強制ではなく、何者にも依存しない、純粹に内発的な動機からなされていること。つまり、「他ならぬ『私』がこれをした」という意思のもとにその選択がなされていること。

先のネットの定義に従えば、②の純粹に内発的な動機とそれに準じた行動さえ確保されていれば、①の抵抗はいらないとも言えるだろう。しかし記事を見る限り、歯を磨く、コンビニでパンを買う、お風呂に入るといったことを「自分らしい」と表現している記事はない。皆が行うありふれた行為が何者にも依存しない純粹に内発的な動機で仮になされていたとしても、それが「自分らしい」と形容されることはないのである。それを踏まえると何かが【 a b 】に「自分らしさ」として取り上げられる時、そこには①と②の双方が含まれていることが少なくともこれら記事からは結論づけられる。

しかし、ある動機が自分の内面のみから生じ、それに即する選択が外的要因の影響なくしてなされることなどあるのだろうか。例えば先に紹介した吉村氏は、火葬を見て、自分もあんなのは熱そうで嫌だと考えたという。その結果、彼はエジプトで土葬されることを選ぶのであるが、これは「自分らしい」というより「エジプトらしい」とも言えるのではないか。

^Dそれとも「自分らしさ」とは、自分とは異なる人々によって用意された複数の選択肢を前に、規範や世間の常識に惑わされることなく、自分の内側から生じる気持ちのみに従って選択をすることなのだろうか？ それができただけの時、たとえそれが外側から見て「エジプトらしい」選択だったとしても、それら選択は、その動機の出どころに照らし合わせて「自分らしい」ということになるのだろうか。

しかし、自分のうちのみから純粹に立ち上がってくる気持ちがあつたとしても、その気持ちで眼前に用意された選択肢とピッタリ合うことなど果たしてありうるのか。在宅死という選択肢や、俺という呼称、スカートのような衣装、このようなものが存在する以前に、このような死に方、呼称、衣装を望むことなどまず不可能であろう。

提示された選択肢とその中のひとつを選び出す決断というのは、「物言わずに選ばれることを待つ選択肢」（客体）と「内なる意思」（主体）といった形で、ふたつに分断することなどできない。これらふたつは、それぞれが混じり合つて互いを作っているといったほうが適切だ。ただ、このように考えると「自分」の「シヨザイ」は当然ながら曖昧になってしまう。だとすれば、「自分らしさ」を可能にしているのは何なのか。

先の問いに答える前に、「自分らしさ」のもうひとつの奇妙さを押さえておこう。それは、ある選択や行動が「自分らしい」と認められるためには、その選択や行動に社会的承認が伴う必要があるという点である。これは奇妙なパラドックスだ。自分らしさには大勢の意見への抵抗が伴う一方で、それは同時に社会に認められなければならないという点のだから。

しかしこのことは、犯罪を考えればすぐわかる。殺人事件を起こした人に、外界の影響を受けない純粹な意思なるものがあつたとしよう。そしてその犯人の意思が「その殺人を完遂すること」であり、犯人がその行為を「自分らしい」と語つたとしても、社会は当然ながらそれを「自分らしさ」の実現としては認めないはずだ。

同じように、安楽死を望む人がそれを決行して亡くなった場合、本人の意思表示が明確になされ、かつそれが合法的に行われたとしても、それが「自分らしい」（その人らしい）と呼ばれうるかは、議論の【c】が残る。なぜなら社会の規範が安楽死を選択させたに過ぎないと、それを周りで容認した人々がまとめて糾弾されることもあるからだ。これは自殺に関しても同様で、自分にとって自殺は「自分らしい」といくら本人が訴えても、それを「自分らしい生き方・死に方」として社会が推奨することはありえない。

このように「自分らしさ」はその定義とは【d】に、社会の承認を必要とする。しかし社会に認められて初めて「自分らしさ」が成立するのであれば、それはそもそも「自分らしさ」なのだろうか。周囲の人間の納得も踏まえた上での自己実現であれば、それは「自分らしさ」ではなく合意であろう。実は「自分らしさ」とは、その響きとは【d】に、ある種の合意の形式そのものを指しているのではないだろうか。

問一 傍線部「く」の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して記しなさい。

問二 【 a 】 く 【 d 】 に最適な言葉を次の中からそれぞれ選び、記号を記しなさい（同一記号の反復使用不可）。

ア 複雑 イ 選抜 ウ 殊更 エ 静粛 オ 裏腹 カ 余白 キ 体現 ク 余地

問三 傍線部A「トートロジー」、傍線部B「パラドックス」の意味を記しなさい。

問四 傍線部C「自分らしさ」が、規範への抵抗を指している」とはどういうことか。本文中の言葉を用いて60字程度で記しなさい。

問五 傍線部Dとあるが、筆者は「選択肢」と「選択をすること」の関係をどのように考えているか。60字程度で説明しなさい。

㊦ 次の文章は松田素二「アフリカという毒」〔学問はおもしろい〕講談社選書メチエ、二〇〇一年）の一部である。本文を読んで後の問いに答えなさい（設問の都合で原文の一部を省略改変した）。

アフリカへの関心が芽生えはじめたのは、高校生の頃だった。当時私は、歴史とくに世界史にはまっけていて、中国の王朝の①セイスイやヨーロッパの市民革命について書かれた入門書をかたっぱしから読破していた。そのとき同じ歴史好きの友人に、「アフリカってどうなっているの」と尋ねると、私よりずっと博識だった友人は、馬鹿だなあ知らないのかと言わんばかりに、「アフリカには文字がないので歴史はないんだよ」と教えてくれた。

たしかに当時の高校の世界史の教科書には、人類の誕生から植民地の独立まで、その中間の長い長い期間、アフリカに関する記述は一切なかった。最近の教科書では、二一―二三世紀の西アフリカ諸王国についての簡単な記述はあるものの、世界史のなかにおけるアフリカの位置やアフリカ史のダイナミックな展開を示すことはない。^{〔注1〕}ヘーゲルが断定したように、アフリカは「世界史の外部」に追いやられ、無視されてきたのである。

（中略）

このように私のアフリカへの関心は、高校時代のへそまがりの興味からはじまった。とくに最初は、無文字社会で歴史を語るとはどういうことかが気になってしやうがなかった。そんなときに出会った研究方法が、日々の生活の営みのなかから歴史を取り出すという、文化人類学的手法であった。

ある社会で現に暮らしている人々から話を聞きとり、口頭伝承を記録することによって歴史を叙述する営み、あるいはその社会で長期間暮らして、慣習とともに体験するなかから歴史を再構成するという試みは、私にとって未知の【 a 】的な方法だった。それまで私は、信憑性のある文書史料こそが、歴史の生命だと固く信じていたのだ。

（中略）

ナイロビ大学に籍を置いて、アフリカ研究をする態勢がようやく整った。だが整ったのはいいが、何からはじめればよいか途方にくれた。文献や統計ではなく、生身の人間の生活から社会と歴史を見通す。未開イメージでねじまげられた遠隔地ではなく、大勢の人が寄り集う現代都市をフィールドにする。こんな研究方針は漠然と持っていたものの、次の一步をどこに踏み出してよいのか、もちろん誰も教えてくれはしない。

そんなとき、出来たばかりのアフリカ人の友人が、ナイロビ郊外にひろがる、ふつうのアフリカ人が暮らしている下町に連れていってくれた。都市政策上では「スラム」とか「不法セキヨ地区」に分類されているところだが、ナイロビの人口の九割を占める低所得層が暮らしている町の一つだった。私は、その掘っ建て長屋の、四畳半ほどの一室を借りて生活をはじめてみた。

電気や水道、ガスや電話はないけれど、暮らしてみれば、それが日常になる。早朝、水道栓の前にならんで水をわけてもらい湯をわかつて朝食代わりのチャイ（砂糖とミルク入りの紅茶）を三杯飲んで、職探しの男につきあってタウンに向かって歩きはじめる。

午前中で職探しを断念して、昼は空きっ腹を我慢して公園でごろ寝。また歩いて長屋にもどって、近所をぶらぶらしておしゃべり。夜は、その日、職にありついた幸運な友人のところへ押しかけて、夕食のご馳走になり、運が良ければドロクまでおごってもらおう。こんな一日が、次の日もその次の日もやってくるのである。これがアフリカ研究なのだろうか、これでいいのだろうか。そんな不安がふと頭をよぎる。

^Aしかし、長屋で毎日を暮らしていると、だんだんと不思議なことに気づきはじめた。長屋には職を持たない、つまりは失業している男たちが大量にぶらぶらしている。第一、彼らは、どうやって生計をたてているのだろうか。田舎には両親と妻子が、ナイロビにいる彼らの稼ぎを期待して待っているはずだ。給料もない彼らが、家賃を支払い、食材を購入し、子供の教育費を^③ネンシュツすることは、いったいどのような方法で可能になるのだろうか。

そうした疑問を抱いて、ナイロビ市役所に向き、ナイロビの雇用機会数や提供住宅戸数を調べてみると、驚くべき数字に出会った。ナイロビには、実際にそこに居住している人の約半分を養うだけしか、雇用機会も住宅も用意できていないのである。残りの半分の人々は、計算上は、ナイロビで生活することは不可能ということになる。

ほかにも不可能に思われることがあった。長屋生活をしていると、さまざまな困難に直面する。病気、交通事故、高齢化、失業、そして死。さらに、子供の中学進学や身内の葬式などによって、突然の高額出費を強いられることもある。日本社会ならば、医療保険や生命保険の制度を活用したり、行政が生活保護などの各種援護策を用意する場合もあるだろう。質屋やサラ金で金を借りるという手段も可能だ。

ところが、ナイロビの住人の大多数は、こうした公的私的の援護制度とはまったく無縁な世界に身を置いている。彼らにとって、国家や自治体は、援護の手をさしのべる機関どころか、種々のハラスメントをひきおこす^④ゲンキョウに他ならない。つまり半失業状態にある彼らは、国家や市役所、あるいは銀行や保険会社からのサービスは一切頼ることなく、自らの困難を克服していかねばならなかったのである。

ではこうした不可能を可能にするものは、何なのだろうか。長屋暮らしの内側から眺めれば、その答えもまた明確に見えてくる。それは簡単な話だ。彼らは、自分たちだけでその困難を解決するために、^B巧妙なセルフヘルプの社会システムを築きあげていたのである。

職がなければ、生活するために、自ら職をつくりだす。それは路上で野菜を小売りしたり、ランプやコンロを見よう見まねで修理する商売だったりする。住居がなければ、定職を持ち家賃を払える友人のところへ、押しかけ居候^{いこう}すればよい。病気のときの子供の世話、近所の女連中がやってくれるし、まとまった金が欲しいと思うと、数人から数十人単位で運営されている^(注2)頼母子講^{たのもしこう}的な小さな信用組合から金を借りる。身内が死んだり、田舎の家が焼けたら、同郷人同士でつくっている互助講が援助してくれる。金がないときでも、ないなりに、ふだんから他人の扶助のために寄付をしておく、いざ自分が困ったときに、互助講は全面的に援助してくれるのだ。

国家や自治体などの行政サービス、銀行や保険会社が行うビジネスにまったく依存することなく、彼らはセルフヘルプの社会システムをつくりあげていた。それは一見すると、古い村社会や「部族社会」の相互扶助原理を、ナイロビという都市空間に再現しているかのようにも見える。しかしよくよく扶助の中味を吟味してみると、それがまったく新しい社会システムであることがわかる。たとえば「同じ部族」同士で結成さ

れたはずの講のなかに、さまざまな民族が混入して、そのうえ新しい儀式や約束事を次々に発明しているという現象は、アフリカの大都市ならばどこでも確認できる。見かけの古くささは裏腹に、融通無碍でソフトな社会福祉制度を、誰からの援助や指導もなく、「スラム」の住人自身が自前で創造し、巧みに運営しているのである。

これは、行政や企業が用意したシステムをただ利用するだけだった私にとつて、非常な驚きだった。自分たちで等身大のシステムをつくり、自在に運用するという営みは、何だかとても【 b 】的で、自分が解き放されたように思えたのだ。それは、日常から世界を見直す試みにもつながっていた。これまで社会の見方は、基本的には、【 c 】的な数字やフォーマルな制度の世界をベースにしてきた。GNPや失業率などの社会指標によって、問題点をさぐり解決策を考案してきたのだ。たとえば、アフリカに対する開発援助の実践は、こうした外部から指示する指標に基づいて決定されてきた。

しかし今見たように、これらの指標が示す世界とは、まったくの別のもう一つの世界を、そこで暮らす人々は創りあげていた。それは公式の白書や統計からは、決して見えてこない異世界だった。その異世界は、その場で、何気ない日常を構築することではじめて見えてくる世界なのだ。そしてその世界に視点を置くことによつて、これまでのアフリカ観や、さらに大げさに言うなら世界観・歴史観まで一新させることができるかもしれないものなのである。

アフリカは、「大航海時代」という名のヨーロッパの膨張運動以降、五〇〇年のあいだに、「劣等人種の住む歴史なき暗黒大陸」として、世界のシノウエンに置かれてきた。同じ人間ではないと理屈をつけては、奴隷として売買され、文明を伝道するという名目で、植民地として搾取されてきた時代は、ヨーロッパに自由な市民社会が誕生する時代だった。ということは、市場経済、民主主義、国民国家、実証的科学、自律した個人という今日のグローバル・スタンダードを創造した近代精神は、アフリカ人を蔑視し、アフリカ社会を支配しようとした醜い心性と同根だったことがわかる。

したがって、一方でグローバル・スタンダードに依拠しながら、他方でアフリカ社会に寄り添うことはできない。それらは両立しないものなのだ。数百年のあいだ、アフリカ社会を歪めてきた力が、今日、「世界の常識」として、アフリカを「援助」したり「理解」しようとしている。たしかに市場経済の観点からすれば、アフリカ経済は破綻しており、民主主義の観点からすれば、アフリカの政治は「非民主主義的」であり、実証的科学の立場から社会をみれば、「危機的状况」と診断されるかもしれない。

しかし先に見たように、こうしたグローバル・スタンダードに立って見ることができない、もう一つの異世界がアフリカ社会には存在していた。日常の微細な営みによって形づくられるこの世界は、「世界の常識」となってしまう強者の社会観や歴史観とは相容れないものだ。それは「世界の常識」となってしまう思考や制度、システムに対して、【 d 】的な自省を迫るのである。普遍的な正義だと信じていた見方をくつがえし、自らよつたつ科学的思考自体も揺さぶりつづける。これこそがアフリカ社会を研究する醍醐味だろう。

アフリカ学とは、遠い大陸のエキゾテックな風俗習慣を記録したり、低開発に苦しむ社会を援助するための方策を考えだす学問ではない。そうではなく、数百年にわたって世界に君臨する強者の常識に挑戦し、それに不服従であるような微細な営みを、アフリカ社会から学びとり、二一世紀に生きる自分自身の糧とするための、激しくそして実践的な学問なのである。

(注1) ヘーゲル ——— ドイツの哲学者(一七七〇年〜一八三二年)。

(注2) 頼母子講 ——— 金銭の融通を目的とする民間の互助組織。

問一 傍線部①〜⑤のカタカナを漢字に直して記しなさい。

問二 【 a 】 【 d 】 に最適な言葉を次の中からそれぞれ選び、記号を記しなさい(同一記号の反復使用不可)。

ア 創造 イ 空間 ウ 部分 エ 衝撃 オ 客観 カ 都市 キ 抽象 ク 根源

問三 傍線部A「しかし、長屋で毎日を暮らしていると、だんだんと不思議なことに気づきはじめた」とあるが、それはどのようなことか。2点、簡潔に説明しなさい。

問四 傍線部B「巧妙なセルフヘルプの社会システム」の言い換えとなっている15字の言葉を本文中から抜き出して記しなさい。

問五 傍線部C「そしてその世界に視点を置くことによって、これまでのアフリカ観や、さらに大げさに言うなら世界観・歴史観まで一新させることができるかもしれないものなのである」とはどういうことか。「その世界」の内容を明らかにし、「近代精神」という言葉を必ず用いて、100字以内で説明しなさい。

問六 本文を読んであなたが考えたことを自由に記しなさい。